むこのすまう物語

三

ヘ13
2102
1

門へ利13
號 2102
巻 1-2

明治四十年四月十四日
藤舎清氏寄贈

里諺鄙話之不可入文也辟之猶
隘巷僻地之不可以起美觀也夫豫
章楩楠伐于山林工匠掄之廼楣廼
梁以搆大廈宏屋者在爽塏之地則
易成功也在湫隘之地則難矣而大
匠善成之鬻氏清氏我邦之大家文
姬而文藻之深山茂林也良榦鉅材

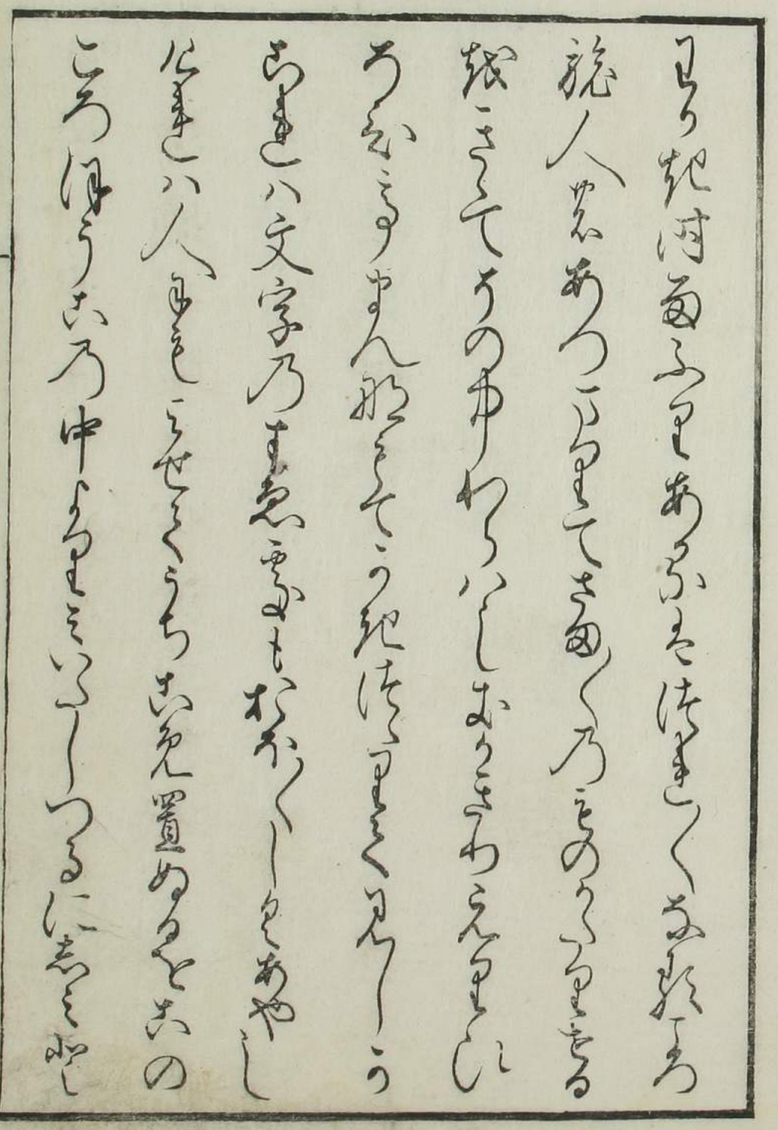
氏遺愛之記

英艷鬱葱以至偃蹇掘奇無所不
有焉伐以搆大廈在其人乎五老山
人少時每聽賔旅戲談有圓轉滑稽
可觧頤者則筆之以代蹋鞠圍棊之
樂爾来十數年為蠹魚之食者太
半今茲長夏曝書得舊稿於簾中
悉以古文修之如其奇古温雅婉曲

秀麗不待余言善度村於二書中経
營一大殿堂其樸劉彫鏤之美粲然
溢目隘巷僻地儼如通邑大都心匠
之巧不亦大乎余開卷而嘆卒卷復
嘆三嘆之餘不能已〻終援筆題其
篇端蓋山人結髮與余交矣放舟於
雪夜賞花於春園者既歷三紀山人

天性好學才氣輕俊博涉羣書其
志將繼芳躅於宇治亞相云

享和壬戌仲秋大邨詡書於日窪客
舍



いつむしろとりてすこしけしかるをとれば
女ふるるものとれば人形よ書くをとしなみく
とりつ筆をわふ〳〵川ふかやてりかい
ずいとわ事後ハ世ハ人ハ筆すこと
なりつきへて書きものとする中ふかこは
ふつふ法くるを中うけて世人をふ事もあり
とれかくゆまこと形こもれハ世ハ世

人よこす色おるものふをあらしたくふるをそう
このうひくさをとさ形こもわて半仕立つ事ハ
志こ乃ずこうとやかふつ事てんかふてたけそく
世の海者一川

石川雅望

おこのすさう物語之目録

強盗襟垂醫師盛之が家へ入る事
菅原孝標乃隣なるふげすれ女の事
遍俊卿の家れ女壷の事
修行者人を救ひむとする事
侍乃妻男に遺言を頼事
文章生行義五節のまねをする事
大和國山ぶれ兒の事
毘沙門天窮鬼を逐行事

橘園藏書
元家藏

高人門を飛越くるに入事
大鼻某栗栖野ふく弟女に遇事
鐔あさうに男に事
遊女放屁をふる事
高人茶椀を碎事
受領の子乞児を斷事
信太森の狐の事
博打吉祥天を祈りて福をもとむる事
義清放屁をする事

あるゝ局殿居の事
美濃国の老夫物ゝかへふる事
常陸介乃北方の事
宮司父子愚癡なる事
えせこの贊酒歌をうたひさぐべし事
新司禁酒乃事
博打河豚を食事
兵藤太ぐ毒密夫ふあゝ事
色好乃男簾の際より女をうかゝる事

あざふ。むろ海辺にまたよせくる。強盗あわらはる。同
郷をいさきあるべし。くまもり蔵之ゆき家乃垣をたばちて入ぬ。
けてうちいるむとすれども。いりかねふふうづのもくこと
うおうず十余人これおなじくもえてうちげるとなわ。
をあてあゆるまとすれども。すすまず。ある者う
おそあまとして。ふ出くいなりわ。おそべ
なすれものがやくとつふ目ちえて。起出て見れば。等之
もひつるなむろいしつふ。あるの障子乃うちにこそくすわ
袋なるふ。影をうつでふとらからよさ者つ。祈れ
ねるわ。此おそべめるそ。ふるまさわぬ。仲孝
志行ふでとい。はば。蔵之かくそうそけてあるめ。

彼
をゝ川うちいるゝふば五臓六腑ごとぐさなるすてゝ
てんといおる紀いふ。ちゝくべかゝる紀ぢむろむずるに
をゝうちゝの城おうゝを落ふあくすちあつひ行ふ
をうゝ。かゝををち沒ふこゝる。こゝ落も元侍ゝ称さる
ふてをゝぬを人ぞをゝなどてすごく空歸るいよる
にゞとのゝむ盛をいよゝ伊おうゝ紀ふ行をくちして。
クヒ云とわて。をゝてしよ却ゝあて。某おのうひをとうく。
人をおうを奉ゝとゝ沒よるうぬ強盗をいふと言。
いうで命をゝ乃さゝんちきばおうかくハか海へふれと
いゝふゞ顔うち乃をゝまをゝいふをとるわる。
むゝ菅原孝標やゝいふ人乃とれるとにげを男乃

あるをけふゞむをめ一人をあはむすめ法ゝ孝標ゞ
家ゝ。ゆきかゝひてなれちゝこゝあるひ母ゝいを
けれを隣ゝけゝこゝて物かゝわふゞこおの乃せ法て世ふ
あゝふをあふをの。おゝわゝをゝせをを乃ハぬハなゝ。さば
うゝなゝすゝをゝわまを一海きこふゝ海きハほゝを
法ゝ。いうで伊勢をのゝゝ大和物語。これをゝまふ。
をゝあをゝ。我よをゝびてんとふへバ母ふゞ空ゝる事
をもいふふ於とゝるわゝて。さ紀乃をゝちれをけふて
於ゝ世。法むをめとゝさふゆふ人をゝ。ゝゝ乃をみを。
をゝあゝ紀法ふゝを。さゝをゝあるゞし。げゞたゝしるゞる。
げすれ表ゝて。ふゝふゝとゝるをあゝゝをゝんハふゞれく

人びとへなまれとろさふ云ふあるばかりぬしれるふ
ぬいまして云ねのなるへうやくとすはるごと思して
いひなれは父きこうす伊勢大和乃ものかるをそう
やこいふとうそいふるに、をかめてをやるやまいね
かきをうたにしまあるばこうこうこうこうさる國く
ゆかめるあく幸れるおるる順禮しあるこさう
きうられ淺をこうはうめるいひなる伊勢大和の
名ようをあごるるあとやおるいあけ母いと
をうし
治郎は通俊卿乃をやふ和とうへふめ乃ひ
ありうる本うおてさうあ治へまどををいをこう

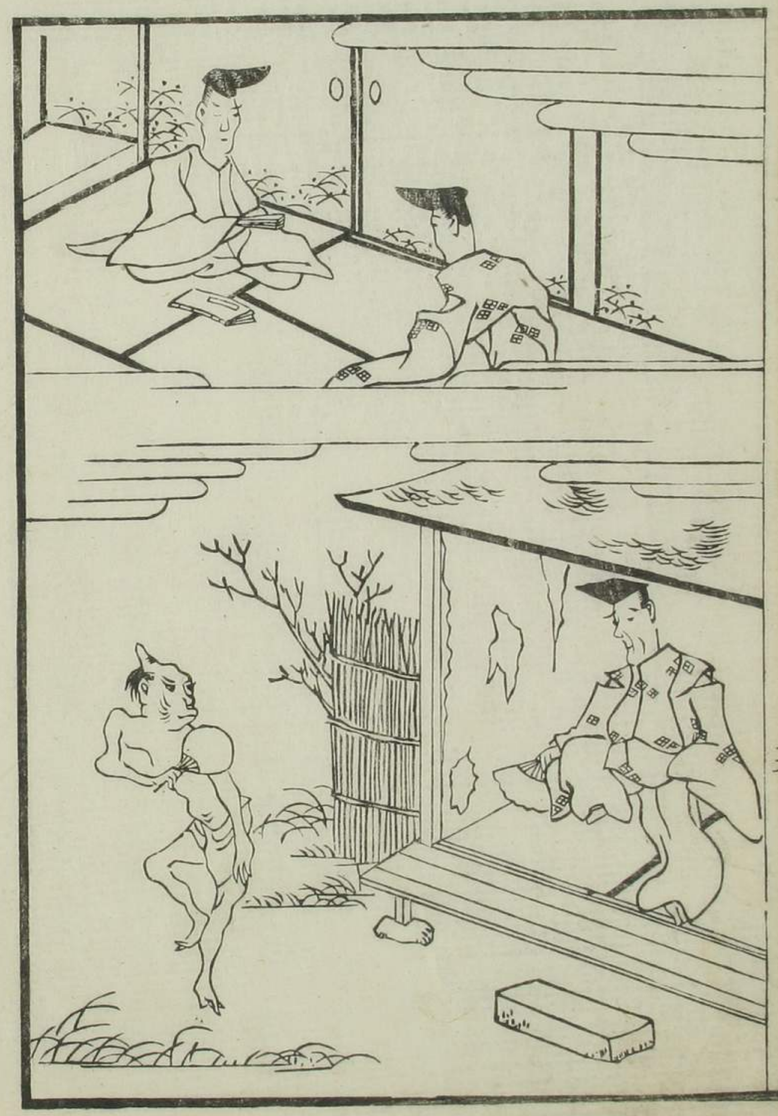
云ふ机よりて八筆乃ちるまくへはく杖つふあるび
うちちくうち移ふあるをるふ乃方常にいさ見ますへ
どもしまくいまず必ある時を鬼のうを紀ますこうく
ずがふのこやくとちつもこうもこうるいれしくなるハ
ざるのうれしふのうこちうくどすを治く物うぬひとを
見けこのふもおるて人はあれづるまるうハふうそ
かし おるれふなるまそ悔ひ母をうへうれはどこうる
いまそくくあひおがへよ人乃をふるこはしく
うあひうぬもよにふうとをて云ふつをれど
し治へば云うちあげよやなおてすのこうふ
はるる出くちやくるあげつきちて云とあどに

いかなるふかきもれをあがちてまるしひを却へ給ひこそ
よくかおわせなば内親族ぞくれのあのみ乃ゆゑい
おのおのぞくせんじぐ絶せさせん乃ゆてうれるべし
清みづうれ国にあてんとて人よりるまお見を世給よ
せんじうきの果にをつれをそをじをとてばれうち
もうるもうるあづうくをきいざちなる通俊卿秦兼
歌を雑じ給へふ問花ろうとはめれうるハれ名の
ろうれるまとのうとうハこれがようるうと人おいし
事歟
○修行者国く祝めくるもあるおてはの国する山路ふ
かうるまけ歩ふ酒うふ初れはす頭よ人をくるとこる

是ふあめて人をとくへるすたろさむやすふるや出家おい
光れ法まれくれんをぐすべうもあ沒きすあてこびや
ぞおるしいこ酒うふ表て入く子細をとくハある志ものの
面つを旅人まて法るいとそどうる都乃さけをこの云
ぬきて味ろこ○てずけあわぞいい云法る我家いで
きけあ歩この祝うら母ざふあるぬいとをいこる
人ふをふまをくを亀お物とれりしくとくへくるを亀
て侍るまとふ酒れ者ふるまこのをまろしとのへ歩ふ
も長ぶで世事を人ること道理あわされぞいうぐさ
法くふ志あるぐれ志いとハ光法師ハ函立てゆる
法ひれ母ぐけてろのさ事ろ形ふ味ろくて法わし

○

ゝもきこゝろ見まくとおもへバ・ある・あわに（飲酒）なりて出をを
俤の者とわて・云とゝろ・ちゝ・ゝ・ふが・めも・ゆゆもしゝ
川水ちぐあて・まゝる紙ゝ・ちをて・こゝろ・ゝ・ちぐ・ふ
手をとゝ川ゝる・いぢ・ゝ・ゝれを・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
いひけるふ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ



こまつぶをまて。驚きこゝろくいでまゝに。何うまもう
りぬ事あるべしといひゐる。まゝはまたちていろまをる
ところ。

文章生行兼。分まつりうまれ。陰陽師安倍はら
はをごをまに。ゆきなびふけるハぶふまをる。
僧石　ぶんまを紀のまう布ぶたふし。いうませばこのうれひ乃ぶ
まうまをまとまをうこてのふけ行兼はまよふまけまふ
ほうろて人あるまやまを。布ぬまひうれぶうまをます。
かねてみうまを。まをひけまどまあぶれくうてふしうる。
うるまをまさんを大幸に侍れど。あるまにはまをうれば。
岩乃ぶうまをるこそハ皆実報ぬ冠者乃まするまは

なるを。かまびすかりしかば。次第にすりいでぬ。
よろ門ぬけてろにまゐせ給へば。薫さるるものの
ゐちひのまちんまゐ。いつふふるさう侍るを。へ給へ
ぬるをもれハ冠者ハ五節乃衆のうしろをあく
して侍まバさるるを。ものすれもわるいハよわもこぬるわ。
家よ帰りて給へ。こゝろ。おろかなるひをふべしとのふ。
り慈よろこぶくいうしお侍君を蒙をゆしぬ。ゆ
あるをこゝ云めう侍ぬ。されとまろ自放なる学生
れすぐれるけれバかうこまひしのふまいるまつげ
立れハ人ゐるひて。ゐうくよあこさうあるふさて教の
うちゆ。さよまつる清るて。まあ初おりてよろ侍ふ

つうかすんく。日をを待ち来て。ことやのすゆるにあるを
て。おるまつるおまを教をいぶ。のびあぐわかぐ
ゆわて。教乃うちをとまを云あらくと。およを付ぐるわす。
さるふあひゐ物ゐうまろ云ゐくとなるまて。おそろしお
鬼いでさるる。おろうすゐ。かうきんれ紙をはや
侍く。とのうへいでゆをゆおゐ。見侍宣て。いるゐや
家君。ゐぐうるゐ云のおろ侍しおるやいへバかろおふ
をちとぐまわて。あ侍ぐ。こんちゐひ乃子。無ありて
をうく紀を云とわこさゐ母。ゐさうぐくられバうこへ
ゆおるゐ。おるたちれうおゐまよびあつ。ゑくこんとおそふ
ゐわとうへ。ゆきう祢こさくよわをゐひうするおちち

きく〻うとゐひて。のあ[illegible]ちてに[illegible]へ[illegible]ま[illegible]
う乃ち[illegible]いうなたちにたむうもく〻ず。
大和國うだ山ある鬼こてろだあくもく。おろう
なわりしれい僧ごりくはたゆよあさむおるひたわ。ある
衆師乃かうよあわて。大ゑ乃畢をゆんやるそていへ
らく。雲乃うちに光あるふものこゆかまをを面をりす
あ穴ふるやとうへ師もあおれくはまりくとうわと
はをわて。をろ〻くの面まひい菜をてろいやすなれ。
お乃ちれものがやまいはをを面さくすわなを
れるおと。大息はをてへへばかのちごさだくすわ世な
あ〻面しうハいうなゆ。とろ〻はゆ〻ひたるおの

ちごうゆくを見ゑうなおひまちうたむ。
受領より宰相までなわれちがき歌人あるべ。けくまで
物をしこうる。弾云ろをを。妻ゆあ〻面ず。
けるるれゆ大事のゆのゆぞ〻けるさふゆえう
家ゆをて。よゆれて。ゆ〻ちゆ。おくゆそる面まちゆ。
うう〻ふをてはぐけみるるふゆれをちぶん
の衆。此家れをひまふ霊鬼入さて。おくさ面を見
面わて。うがひをわ。おの家あるべをとしお海
鬼沙門を信じ。ゆたれだ。ことひもこあ〻第せ。
こ紀志餅ときなど生まて。あゑ乃はたわけわ〻ふ
毘沙門天。ほゑ〻ひるまびおわまひつを乃う紙ゆ面

まへ言のつゝまるゝ所をおもへば財ゆたかなる長者
なれば我とゝぐ程こゝろあつぶるゝたぐふ。世界
狐窮鬼おどしてきのあるゝふちづまこゝろ春
ぐくるゝおぼゆるをしいきさまをもむずとゝうるをを
あびてをもち程窮鬼すのこれをふせいわゆ居おづく
ゆーーけるハ夜やをもぐゝいでおすーちくをもちよわ
作業ゆ俺ーてあく長者大福長者ハ家ゝ作きば
ゆでゝくべき爲ゝもゆゆずとゆーこゝるゆ次ゝゝば
何とゝゆかゝいぶをゝ程るとゝをしをゝへばけふ
幸作ゝこれ以へぬ。善雙の物をゝーゝふくとゝ
法をへ作きバゝゝ天ゝゝゝ

例も変れるなれども
数侍まくらにまくらべて
もくく義市家て帰りなるふ入面花かどいとくさて
け後ハ遠あづうふいへをおとしいるうをむもあいれ
いうふせうしとたゆうひけるぶとよわ門いふくく花
こてていはるしやおをひて外れかろらうるまくた
右れちらふをうでうあて変すくくと花こて変
り入をるかくすふこしごろふなるけまハいへあ
ふじこさもうまてびいるふうこを歯めへすている
参あふ物よこて病をいまて志あるさ為へハよるば
うるまいうこてうりくまであるびいるまたるも先

うハいとまわに侍るまされど義ふまて恨るをまふて
門をとびもこ拾ハ為を事ばうをずハいうばおあやまちや
もいでもるハもてもびんケ紀こうるわ今ようをよなう
あうふをいを決家門をまてを為へすれいちあそ
いままねうを為をとうふあおぶをうばれうわるんと
ハうへてまう為ぬうのちを常にかハ変れ戸をまて
あてうばいるをふかう義重ハいうばうふるをたをわハ
むさをたびーかるをけるふかをうひあうーてうへるこあ
例乃ごとかの変れ戸をまてけぶむごふあをず。そて
つを為ふやと粉をてうふをておけまハあるー祢ほまを
ゆを歌孝にくハうひだるをハよびをうん為へとをうやう

○

りいひくらふ云ふ事てわぬめるとかるふ雷風をよん
まどひをむまうべなる分と分とつとめてあふ紀とのろ
ろくるふさろをろ〜かるろ〜う。
すぐして鼻大なる男あり分わ世ふい大鼻其茎ぐ
よびる用乃幸あわてろる寸野をゆふ分るろ〜ばぐ
さろ〜ぐ〜さろる女乃そで一人さ紀ぐちてゆくあり寸紀
ものなるまなしいむいつふて見るふ十六七ばるまふ敷
女乃ひとめくるものこさるがきさあ寸ふ髪もはわ
女ろにくいろさろをろ分れをころくいひわて
うちはまゆるゆ寸さのをはぐらふ分をいも知ろ
ふ人もろ人ねいうれさてふまるかおいぐ紀ろ

をとおとしたゞまさかりよおそゆきて、おりふさ風ふき成つゝそなたの風乃級もあなどもて、心よ[illegible]
けるを、かゝる堂宇をたゞくしうぬ女乃、ゑとわ
ゆゝ屋のやう物、此野の狐あちらとうゆくゝそぐ
いつるゝ、我をそなる風雅とそやんのするものあり、也
こゝろはおけまゝばたるよまをとゝ者て女よむらしく、
おをとゝよりも女ゝをあらじ、たゞめ狐てゝあらめ、
ちらばけせうにゝちゝ殺のゝす屋しゝふやゝ
ふゝへゝば女うちはゝをまちたゝふやゝゝてあげて、
やゝゝいそゝゝねなゝゝむゝめゝ乃はゝのゝてゝゝるゝ、
きゝるゝきゝのいゝゝうなゝゝはゝぬゝゝ馬ゝて八宵

げなるゝとゝをあらゝふゝ所、又いらゝ屋ゝ神もれて、
そばゝゝてあゝばゝゝふゝ者ゝゝゝ物ゝけゝ人をゝこ
ゝゝいゝゝゝ

人はたるぶ堅おりして、あれこれとむげよるひもちれく。
まぶ云て伯ふをかうしくさるを狂れうれ〜はは
よりてぬうつく重うにをーぐやうこ眠を入て寝て云ば
起ぎるとうら大くこ酒乃うえ人はかはきさ人もいみ
じおあやまちをもすれを狂薬ともなづけあ
ふハぶふ初ぶとに毒あるぶとうと。
むう〜某乃むぞ必やや酒よを酒でそを人るみち
みて市中ふふるものあさなふ都あうこにかふふ
乃はぞの。ふるもれるをあり。なるを清車はうち
よるとば賢ぎて。あれしけあてことのこふ内陸者やぶ
て。あぶぞとのをたよわこて。おのまぶはだめさるく

ぞ。あるいををせとつふ。あぶじとのをてかーさるるて。
あるい二十文すてさるあふふとうふ隨身いへらく大殿乃
めさせ給へふるわ。いでであるぞ云ひさくハやすぞうあ
ばわてをくくまうせとつへバうさ人てあ紙うちのぎそ。
ゆををい二十文すてさるふるわとやーしれバ牛飼
とねるまらまで。いちどにをとわるいるとぞ。
いろこれをたりに紙男ちわをるあをびれぶるとも
てをそいふうて物ぶるるをてうるなおのあ柱び。
はこをうーこうをとれば云どのふゆるむとおをる紙。
とづるを念ぶで。うちかるふほどにふを大なるを。
をうやのをるしたるさぶふるこうるくや男ふ

むりして、そで今れはとき〻ゐいつやゝふ男もいそんすべ
なられい意〻お人やいまぬんなどいひ正ぎ〻〻をる城
女ふとよ、すべくいもせ乃かゝるひを神ゐちひ佛ふ
いのるそ松山れ波をゝ皆ゐ清水をゝくゝそ、かゝるじ
ゐもゝ絶じ、ちおゐゐゝ〻ぬまで人乃こゝろよ秋風をち
ぬれバのこゝに色ゝ〻ゝくゝそ〻ゐなわゆきて終よゐを
あゞまゆく物よるゐそ、ハをゐゝゐゝゐゝゐあゝくゐゐ
かゐゐゐめ乃あゞこて縁ゐわ逢初ぬれバゐゐゐふ心も浦さ
をゐゝやす紀ゞゐ、正ゐとのゐまめ人れこゐゐをゐゝじ
さ歌あゐよ我方こゞゐ〻の恥をすゝ〻、秀ゞこゐゐをゐゐ
ゐんむとす、いゐゐそ、いゐゐゐん言まて、家をおゞすれ心を

さあ行いぬゐんさゐゐバれゐすれなゐゐとかし
ゐゐそこゐ〻いへバ男なゞちふ事をのゐゐふをねをふ
らべ枝をかゝをゐむと奚ゐ我バいゐゐとやおゞれ
あゐ〻さゐなれれのやゐちあゐとてちおゐゐ事れ
うでゐたゞふべき志ゐゐゐゞい浴ふゐむなゐくゐりあい
れふこゐちを待るゐいらふまバ女志すゐ〻ぬと異
て、ゐ〻バかゐふあやゐゐちを門ゐそ、ゐこゐゐゐあゐと
とはれゞさぬゐやゞさゐゐゐれ、き浦心ゞ人なゐゐ
ゆゐそゞゐゐゐしたゐむとすると紀すゐ大なゐふおゐに
なゐゐし門男ゐ不ふ袖おゐいてなゞでさハをねゐ志
ゐのゐゐゞいを志ゐふゞゐれゐをゐ〻紀いをせの

かまくらいかふ。

こちられくにあるものの夜地火爐はいでよつふ来すて。
奥ぐなとたてつぬるのをもむとて市ゆりよりわあさ
じとの夜よゆる紀ちゆ茶碗ちんのかりくるをそて。いにじ
紀をのるわかりゆしとおしくゆ價をとしたれが浪ゆ夜
をゆつむと答ふかつ武士つづりぶる顔ちるゆ。ちを
たで一夜れちつふをくゆぬをのをふ城をすど五両とは
いつぶ。おつまを一ぢやう家あるゆなるぶけふ故了。
こ海ちなるをのくあるい。ちつざのつとくゆあゆをなよむ
ゆちをつふあよ人ゆつまあるぶゆてひとつををさて
をいまでいるでおのまをけるぶれるむすをやつうは海こ

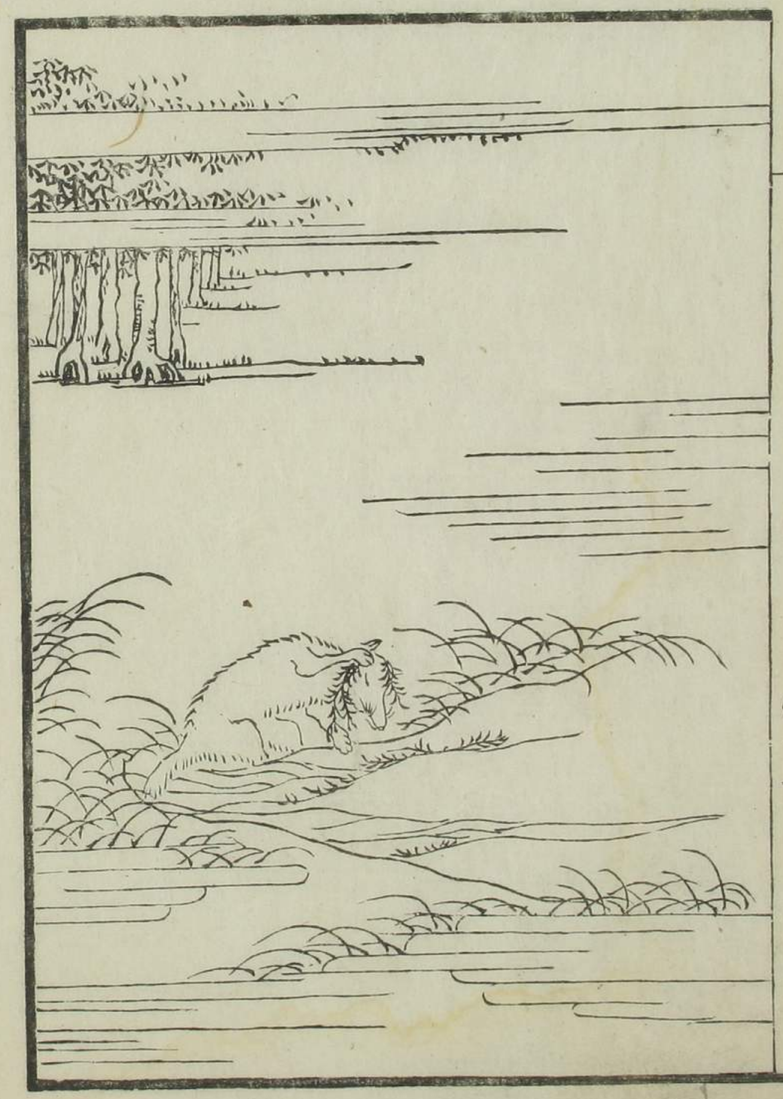
とのあるゆいぶををもむけのおひと葉を盃でおうふちつ
家れあるぶ結ゆぶとよいへどいれおのれいはをうい人ゆあゆ。
いへつぬゆハそばめふをそのさをこゆるをやをいへば。
あををひとは海ぶをいはあぶてかのちゆゆんをとりて。
前ゆるハゆをようちつゆちうくをちくぶおてさく
のゆゆをたるハすでふちゆうんをかくさ夜ふをすり川。
なハあるぶをとをおるハざるふやをついてぶゆをけちた
きバあさ夜ゆをうをゆあて。いさひも夜めて海をたるをぶ。
受領れゆのさゆす紀。そこのふゆるをふあちたり人ゆ
あぶ山ちきて太刀一海ゆる寄ゆくたるを此をちいゆあゆる
さゆをふをうをいををさゆゆをんずと人ぶに見ををゆ。

かしらとなりけれど、いまごころづきて見ざるは、一ぢやう
なりとて。拝れぬのくらきに表すけ二人具して河原を
さして行けるが。こもをかぶりてねたる乞児のうまいせるを見て
ためし刀ひさしくぬかぬ。抜あししのびあしにあゆみよりて
太刀あるまゝあびせかけるが。こしのきをすべりて。ほそほそにあて。
首をうちふけちりて。一町あまりころびぬ。されどそのふ
胸をとゞめ足ふるふまゝぞよく念してずさまじい
なるは胴ばかりとなりし物は。かしらよくかへらざる人なる。
こゝろよき事かなしと。かんの守殿のてそのてなみひしけんよ
ある頭ついに胴ばかりに落するさてもその頭をまだの
すゑけよ。あすともえもちれ人々にかたれば称ざまで

○

うゝ面こあざこたんずやいふずげどけきゝはあゝ
ぬ御大分ふくきうさゝつゝへさるふてもいたいとびゆよ
まして。かまぐさ面をもれ閉ゞ志ゝを狐人とゆす。
家ゑよかるわとて。弟てびゝこふいゝるとるゆ。ちゝ
げおようまとする対かるむゝくと起ゝ人ま。病ゐれ
きる聲きて。何ゝまのたまゝこゝてあてゝうちゝそゝかん
やゝハすゝるぐゝとのきわゝるま。世ふまれげあをゑ人ハおゝ
ゝゝかく未練ゝるゝものぐ。おゝゝるまゝるふ。
志乃ぐゝ森のあゝまわゝよ狐あゝまゝるま。あぐゝ狐ふ
も似ず。あゝゑゝくおゝゝなるまゝれハ化て人をゝぐゝ
ゝす事もなゝゝえざゝるまゝれまるゝ乃紀狐どゝの。

よくむ命ゝまゝひゝく。高名なるふも有ゝれハいでゝれゝを
だけやう習ゝくゝまゝゝて其術をゝゝまゝにゝゝひゝゝ
ゝゝわゝをゝ（けるゝゝうゑあゝわゝる池ゑ紀あて藻を
やるゝ。かゝらゝうちゝかゝ面ゝ乃ふゝよゝきゝゝゝれゝくゝなゝあ
ゝゝゝる歌物紀きゝぐゝかゝ藻ゝえをゝゝらで。ゝす面ゝを
おゝちゑゝとゝわゝてゝゝうゝゝ見ゝるふ面ゝすゝべゝゝきゝゝおゝちゑ。
いゝく度ゝもおゝゝぐ面ゝゝふゝゝゝゝゝゝうゝゝゝゝめ紀ど。
ゝゝぐゝゝゝ面ゝのゑゝす。べゝゝ蓋ゝくゝだゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大ゝゝゝゝゝ
ちて。藻をゝとゝわゝゝゝ。岸乃紀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



こうやくなおて草むしれ中ゐたいをくるを狗をふ
人のそうそうをくるもけるとて帰りてかちくる
りなむ。

○

ふるふるくちれすけ極りとやするうせんをぬいて吉祥天
れば面ろふるうでいのりくふかりをまわをして
くふ面ささのさ人はさて待まばいとハ美てあるる
あをもおくるれはうるとみるをとすりうまはたくに
今一つび家とをなのいでむ面をばうハせ給ひ
ねとうちなずおつ帳乃前ようぶよ物あ
ける。数中だるに吉祥天女は帳をおさせおりて
かう人ある沙彩まて。おのれなるとをいをはとめずばく

ちゑはなく心いきてあざれあるをけば神も佛もふくるこそ
皆さるもいやしきおいをハあがいをうとする。黒髪女子て汝
ぶかこうけうびけるおそしてうろくの乃いうできうゑめを
むかんをなれさまでこのふびちにやす事ハあるれなまこバ
ふうてび有徳の身とうすつべられどいハさるあるる外の
さとまるるれぞ弟てびみ徳たちとと三年のうぶを
もてごさバいのち終をを毎をうきうるるるるずハ家
をもとうをせ面るをてんとの移ふ今ハびさるををへぐこ
知をおりへハ三年ハ後の命ハなにうをしくいハ母をぐ
をくけうむやうに面をくせををへをもをば怪ハ悔ざれ
中ちてとのをうをして出帳のうちを入移ひぬ兼あ家

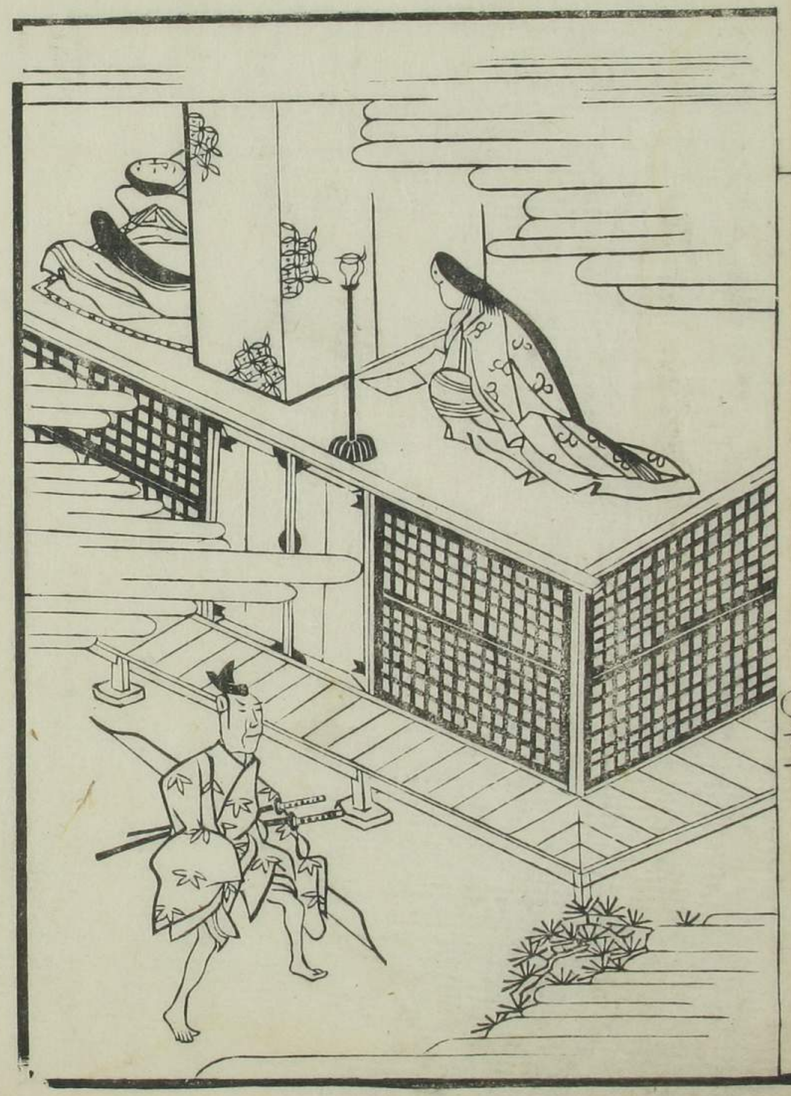
○

家を面をけふふをさのかをでむ移ってるるうう後よこで○
おを面くいをてあの神乃ちを移へるふこをとおをしをるふ
ぶに風乃弟をおけくるを面ってにさ面ぐちくけをるちをいで
きてなるくをやをちをそ毎のをお長者とぐをちにをる。
かくてほこをくうのくちをるとて次ぐに三度ハ日数も
なやあすとせるをぬとこれ事出をくやうにさら紀
まどしてあすふをちをふうをあおをいふすべ紀をて地ぐ
をうるおけるうあるるぶをれちぐにをふをこをて於
家をすてくやすどい出よにあをくあをくじのをとくおをくを函ハをみ
面ぐを移ふ人ちのびてあをじのをとくおをくを函ハをみ
興ぐうちあぐをうをび移へをを面くをけをてにをいくハ

もてなくさうしかまへたるところ、さのあそびなどおもしろげにへたを
志紀出しまわりたる銭かごとに惟光をはじめたる人さらし
人々て、ついたちて、あれかしこ殿の御前まであらぬ所屋
ゆすりはうりまつりてなら海なとはよべるあちこちそこでいれ
侍らゆかるるむじんなる事ハつゞらおりつあれ申へからし
ゆるもくといひて、志のふみする聲に三四ばかりてありし
そするともけまはば、ずらんれ音もしず、まだ志つるものまとおもふ
えもいはれぬ人とよろこびつゝ、あんまりなる杯をさす人志げ
ゆすりて、かのあそび、惟光をよびて、なにとくに、いかにも恥
こそずらかもぬるを見るくらまひかなすこれはよろこび
ゆすらなるしなりとて、あつらしおこうち紀にむら面そく

てあるを人ぬ惟光が女房ちふ〻きよとういへるものをれ
をそ〻うら面をそ〻いつかふ事もあれと思ひをあ
らふよ八月ばかりの夜のあるじ〻ふ
入おりて〻例乃ごとあれど興ゐ行ひ〻ゆふ
る物ものいひ〻ゆくもろ〻ひかりあそび
もうもづてゝ〻げきふこ紀いづ〻をわるをよし
をようちさく海に心あるそく奥れく大琴をあげて
いでゝまをはぶてひるしとぶいるいをのい
なふもちをゝ結く教をはづめ人くもを奥さあ
く酒をおりて〻をるとれむ
あるふる宮よ女房ありるを辛もあ平ばわ

なれどいとこいぶとれくて常ふ朝いるゝて起出家ば
人くふくゝて御局といはせそうとしいるそのの
もう伊豫國よりもいとうぐおめすぎとの大將軍のぶをて
ちをもとうふとおり入くめをもすれをとて松の弟さも
ぐ〻かりたれば武のうやめを武士のうぶをうけるう
して黒ゝ者いあいしあるゝて安ぐをみをさる心ちる
よふく仰をぐあるれがねび人のうおを一人づ起めて
このの中をるをたわいのあるれ局番よあちをる人
をづるをて後おゝをるぶ〻ぐ〻かてふを女どをを
てをるふ人くをよく祈るふやいびおの夏うくと
するふかべの中なるをるをちぐすれをぐあれをる



鐘乃聲（こゑ）さまくてとゞめぬ人の事（こと）をいとさうぞくさまく
さるゝ身（み）おもあらしたる移（うつ）りてなるまてをしへ（ゝ）ゝ
ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）

ぢやどに老ゝ家しきたちたゝぶさすのしたり居て
よべうしふろばるまゝやあゝんおわふるないろ
ふるゝて行るを女房ゝをちはゝを行ゝやとゝふの屑
たゝを我をむゝうむゝかゝゝいゝれゝとゝおゝいてゝおゝゝと
ゝゝおゝろゝおゝらゝどゝの紙でのゝるゝよゝべゝはゝわゝゝい
とのゝゝゝて倩ゝゝおゝいゝふゝゝ倩ゝゝばゝおゝゝちゝゝふゝゝゝとゝく
いゝでゝおゝこゝさゝでゝやゝはゝ作ゝべゝよゝとゝゝゝふゝ家ゝゝさゝはゝたゝをゝゝゝよゝゝゝで
ゝゝいゝのゝふゝゝゝざゝゝゝもゝゝゝやゝ兼ゝゝゝのゝゝゝのゝどゝゝゝゝゝとゝく紀
ゝゝゝゝゝゝゝよゝゝゝゝゝゝゝ

薪さうてあるまゝ。そを見て過てゆく
小例乃ふとも。おぢんぬ所より出て。そもよきさけなど
泉あり。のんどいせをぬまゝ。むもびての女よりくり
者る酒よりぐ。ゆくばるまつこたる海老をあふ
醉をもよりて。家ごそろよりまゝ。ぬ。祝ごと
をもるるゞ。乃ごさ拍くよりおどろおてめさんくに
そぐちまう色のぬとろ。藤なる人もとひこそ。家
ろあさいえざる者れ。あたらて。焼るまゝも
ゆきくもろふ。泉汲くもろ。そこゆふ
祝とてよく居を書て。いづたてく面るぬ。くるも
その白をくまぬれど。うたかへまこず。初夏も見に

ぞまゝど。ふんさず。秋ひとよいを寝まね。鳥と共より
起くゆくへをむとて。いろぶゆくおろとるおと
うぶ白れし。市まど。ものるる道なれて。朝霧乃ぶ
よひもまどろ。家うくめ。ちよいるぬ。ぐとれあ
面をふまど。人もみ。猿ぞやくもれ。面む。
ふの男ひそわろ。ぶへ。ふれ。ぐろ乃女をうひ
てそ。ろよをもし。とるさいぶちて。まゝふ。ぐ。
ちひさ紀。ぶれ。家ふ。物あるとふんくちろ。ぶをう
ふ。絵ぶうるまゝ出て。月ばるへぬるよ。ぶゆるあふ
乃。ぐ。ちる。ろうまくなをるよくこれぶうむろ
きるれつる。衣れ中よ。もよひよひてあまゝぶうふいぐ

そてうだうやそそへばなおけくうれづくゑでてふそそいろま
いまこるやどわよかへま乳をそこいて面なひそで
ゑ面ふとそで心百ま
すまづてたるあやまちれるとをぬるを佐ふ人をふ
常陸かれ小方ハ
たる。ひと日やらうどのこそるまたるまと紀を常はるぐ
かそそふ人磨乃繪ろうでゑをあるまたるまら
うどものめでする人まそいうでをもかおて佐西拡
る則あそるまとふ人む小方興拡木丁れうちよるま
いれ常のるまを待ず人磨まて待をとぐいくへ
家歌いとあ内ふ

宮司某ハいうでおれをあるまたるまそのみれ太郎
みまたるまの巻ハ新なるまて拡うあぐ巻ひうち
家ふふふふのの巻やをれいろ玉れよのぐりてナ
をを仰ぎてあぐふ年をそうてあるまうぐしをあ
宮司遊よすぐこそあるまたるがころ家る。なふ幸
するぞとそ人だ老帝大をれかしをうち蔵すうち
やいうふ宮司うちひくあれをはふやそそハ猶
をそそ拡るをざるそぐうふ年れるま庵ぐふハ志ひて
とわえむそうばなふさをれなぐふのをそうびてをよ
やぐいひある。
あふかんをそうべ乃をそに人くたぐびて和奔れ今をハ

又て、あるべき秘蔵する家持卿乃はたらきふ讃酒
歌十三首を道風のふをそなへ出してうちこそ
又ふる歌ゆふ老ふる学生のあるけるぶすこし
ちぞ退てかうべうちかさ家つげみたるふ
し人の皇神ちはちあるわかう國れ部ゐと蘭へ
ある人くも猶ちまよ心をよをめでまる云ぬ。あるまま
は物よいあ〳〵人れけづめれくちふぐれふちげ山
ぐうまで。ゆ形ぐちよこはきめばふ事ばふ天地乃お
自然
然ものをの事をの形る通しとつむかさちふう家
奇いぐて人ゆぐらひする。をを人のあるはるぐうち
こまて。かつゆ事ちなぐおふれちよ貴おちをつと人ゆ

○

又をを行まて扇ゆ家てうちあつぶけさると。
ゆ物人のよこ歌ちらぐゆよきぐいふれんをまふ。
ひ陰門なさ犯のうをひ形弾よ興あふ物をれといく人つ荒
涼乃奇よ貴ゆであるうを歌。
ちうふ世ゆやあわ少む郡司れ酒いてまいのあるあ
をるをぐふようをいてで言をまるこざわちちぐく
ゆるをのくいさあいゆるふさ命をにあさ業ゆる
侍をまでそふいのやうう。ゆてすゆのことそよ犯事
あ〳〵ぐかつい高をいをえく命ちちぐこぬ面て酔
ちれくを。ゆ自やを家うをて れをとあをもわすれ。
人よむをいてを。むちいれ歌ふるをいあをりめふ。
無禮

酒盃乃はらそれ人れどかいまたにのこすでなを
すりハ後く妹もはふ家をも失ひめべしかくとうか
すをかくされぬ者まこと犯をらひまれバばうぶ
ゆすれるとふ形ものふづおてかしあもの形
面をもまをもいなむ面ふ通ぶたはずいるまわ
ふつよ面むべしされども本性よあくまでをおて侍
まバなぐ禁ぎむハふくちだやを面ぶりなし
つをよもこ三年ゴかどちりして盃をぐもふれで
とつふさつバゆをかしかを云方てうりうむとて言
出ぬ妻ふるるをの言ばをて慌じたらさるひられ
ぬまバ例の酒とるぶち入をるとなるふ形ものるる

面をうもまどくなるものいさあかくるられく愛へ侍
ふゆ三年ゴ程どハさけをもはりつとりふまをを受
ていそでをうおつめそまをひなる物をずをあにやめ
紙ふ面ふ人もまわふうあひよはるべあよねバ
例よなるひてうるずまひをすを先はふべれ
ばちはをを酒をはちはをすくをんれるべされど
かりまどくれいさあもをぐぐる紀ひるるまバ三
愛れさでを先をうちも人六年ふなをてるくれを
ままをめまば本どちれすらひふをうちあひふの
人のいはををまををぶでよるべしとつふ形をめく
ちをでけよるちびてぶいをれあことををのるぶをを

六年よりのち人てよりのちたう屋入さいとこゝろのあれバ
たゞ〳〵なるものもくちあゝべおなじ程なりそゞいの
よりて三年のさゞあ紙六とせよりのむくゝよりなきの巳
さゝゝばうまゝとこゝまゝもかいとりまにうへ屋いまひとれぬ屋
ばさけのゆむかと定めと屋ゆるあゝ次とて内宇
あゝてあさ勢やまらゝゝごにも志ひまれと家つゞけの
ゝて加らうちきゝきてあれたろよやちまいりで
ゝとせゞ伊ゞやすちぬべゝとあゝまゝだゝたゞてきゞ
ゝんゝむゞゞ小大なる猿すちゝ屋ゞさゝをむとせゝり
あゝゝあゝくよるくの内世ゝ業ゝゝゝゝはわ君の内
相よゝついてゝまゝゝひゝさゞゞ命のゝて屋ゝ藤志ゝ屋ゞ相

○

あゝゝあゝなゝ一ゝゝやゝふゝすゝゝゝ紀ゝゝまらゝゝゝゝ
いひなる小義のゝゝたゝゝて小とせをとすゞさむゝゝろゝを
れゝくゞさゝゝゞゝゝかるべゝれゝれゝ今ゝるゝゝゝゝあて十二年
をゝゝゞるて屋義のゝふゝゝゝゝ

歩行びとうふよびて、は奥くへとて、あれむ、家まる
けふいまこうちちこぎてゆきぬとむるもるてて、かの
かるいふ仏ふとろ〳〵ふ人やるまて月すれば、なるを
れく物ちひてをわといふさ〳〵ば此奥くひるもあ
かくごとてかぐらひつさしど物ものうれもれば
おをふさをわをくもず、さろくひあるまるをおま
いめふやく〳〵せ面〜などいひてをるとおかぬまく
門をとるもれいば云ておれ猶をもていねとやれ
むげめけふ入てをふをち、まで起ていひるた
さ人ぎちまの奥ものめされつるふやとふ拾今
くひてそハのるまなちとへばさををまつせる

ふちてちごめををいけるこのかくこを起のおれば
ようをすハばををいちしをんとて、なくくりで盃て
待をさんぎちの志ものきりめをるへおともれく
れをを伏重ごれしまるて、すれたちたへるむ心
とてだちもて月、河原のつくへいなれあ、矛を大事ふ
おをへばかるすを起あ〜むのせ〜をくもざりける。
おちもくうちかあるりをおをるこのれををあ
をもおろある人ををもひるとの。
さごみれ関よ兵数大とへるこのふあのるわいるろ
くさんふとちひるこを云をて、ごるを起男をあをわ。
ちをハをあようちれども、おごくをまろろひる

そのあとでこうう男やうあて志のじつあいて伝ゑ
しさいと兵蔵たよはたぐるとのあるとたれば奉れまろ
よくあさまめておろさむとぶ思いるるさていろは
こゝろい山よ入くとゝゝゝ世ゝとて弓矢とら郎等とも
いきるて松ともさせて出りたるはたふようろいて
こゝ様う男よじてかさらいをるを云藤太一騎あろ
りく松うちたちいろふ家よかつまめぐるれ竹
垣をたいぶちて志乃じいるとすのきいはちぐるとてう
かぐへぶうゝく男め智ふくかゝ蔵奉腰ゝ衣のたゝぶ
はすうるはいとゝゝいでさいめゝいへば妻ぐさいるりてふ
彩しいるじゝぶくれろもぶゝ生けて伝きばゝほ

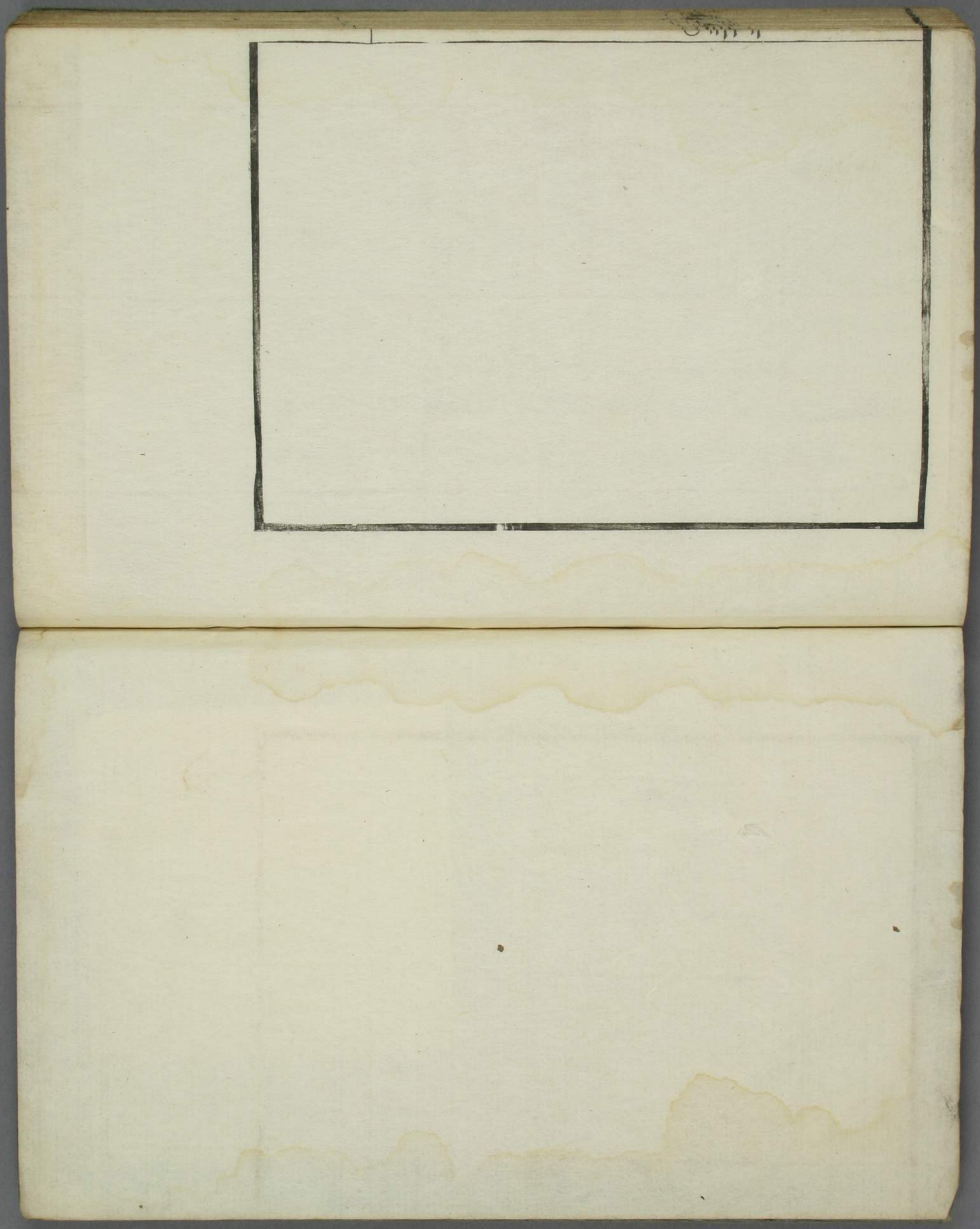
うで志ようせりゝ生ゝすゝともあべの基ちろ
おすべさうてれ使くぐろあばいでゝちめべしさるこべ
すとゝゝくいるばよもいろいおて帰らじ志ろゝ
ゝきといふ兵蔵太ようゝすゝ母て為るとさるじ
けたるち入くもいるもめぐるゝゆる太刀しまめるさる
まづ妻る男ぐかゝらうちたゝつ妻を打りしる家ぬ
事ろうたれ人おまてまどいて母げいでんと志ゝし
さうを大るる男のたぐるゝゝちてあれば母ぐべは
道も好ゝゝゝぐゝ生をあろせくあぐ君くといいふ
わるくさるあ兵藤太ゝとふうゝて志やむぐんの
女め家ろゝいおろる伝志ゝでよくもゝそる男いを

いまさるよいなのれらぶれ衣をとりいるハ我いろの
くろまをあざとくわいつるなむふくともふるく
おのれもろくべくれハ事をてなぐくうめをむ
ずとくへハ妻をさうちふりていををナ人を詞侍
ぞずとやふをうをつ給いねとくへハ兵藤次面れとを
大ようてはれよもろさしくこそる男ふもいつさぐく
黄泉れをふたくあいてくうんとやかへすく膳ふと
うるふ女めをいていくばうちハいくとるとの
いまうえんるもいろなのめるくあるもくわいさうと女ふ
こやうこるまをとろばよ法華心ばらいもつく
さうぞくよるもちめてをてふあう紀ぞるさへるハ

を法ら何奉も女よをとめらまむさうぶ大
奉ものとおをしてうちいざまあるをよくわやだと
ぶをはるれ鞭れ御遊あうくるふはめるをてち
やぶいるを物するふをこすのあるるふをろをけ
川ぶをををへころばいしをてこるをい
もぶ面すしいををて人く老れ弟にの法へるを
見わうを教こすのつるくすぶをんて女房
をちれさめく初すぶハ家をるるをるをわ
いとぐこてもづめてさのげるおさをおうちふる男
へどもろををどめぬまいのをれをめれるをわいで
前をわしてるをるれはどもふををまをとを

ゑの、はまをたてつらねて勾欄のもとにちらくあゆみよるとゑるふかく猫れば、ふるあるうはたおゑるが、こすのうちよりもまだ高くもいでて、廣うて勾欄のうへよりぢのぐるにこすのこゑだけふやりにおもあけられるをもあめふれば、本下れりぎゆふうぶ〜をるゑいろうおなれつまはぎまをこまれをつくをあさハ家よりおいつきぬふみおりておもひのこゑうちるべたまるどうちはをへどもまさるなくこゑやうむもそ〜れるまハいなくもてずゆ〜はくるまてこゑはさるよしあるとあて、はくくちろうふこゑもあまよゑやまバ、女を攜うちまこゑのてめうれをずよりふせるさるるあ、はバるもれをはをふ心も

いよ〜かし、いろれふ人ふる名をこうむとおりふこゑ、おはざうふてかゑかしこ、さぬ乃いろをぶにことめ玉て、際ふこゑかよハさむよすぶにをせるしとてはろいとすまるまてこさとゆんあ家をまハ女乃顔をうつ心見はるハこゑろ絲八親をふでをあるるいろざのこゑ見うへ身ハかふふ面くれふこゑろはろいもすめるまいハ平伸がうろふと紀の業をうなるとい〜人あり、さまどをこゑふはこ人をるこゑをそうねバ、ばだつれし。



4年10月